甲状腺外科草子 148

藤堂高虎の白餅

杉野圭三

藤堂高虎（1556－1630）の逸話は多い。

その一：永禄 11 年（1568 年）項、小谷の郷の賊を父虎高・兄高則が捕らえに行った。高虎も同行を志願したが幼少のため許されなかった。しかし、勝手に父の刀を取り賊を切り伏せたと伝わる。

参考資料

その二：遊びで家を破産させた 5 人の家臣への対応。遊女通いの 2 人は追放、博打の 3 人は減知の上百日間の閉門とした。「女好きは物の役に立たないが、博打好きな奴は相手に勝とうとする気概がある」との理由。

その三：徳川家康は元和 2 年（1616 年）、臨終 10 日前に高虎を枕頭に招き、「世話になったが、来世ではそなたと会えぬのがつらい」と涙した。高虎は「来世でも大御所様に仕えるつもりです。私は日蓮宗ですが、大御所様の宗旨である天台宗に改宗しますので、来世でもお仕えできます」と答えた。

その四：最も有名なのが講談**『藤堂高虎、出世の白餅』**の話であろう。

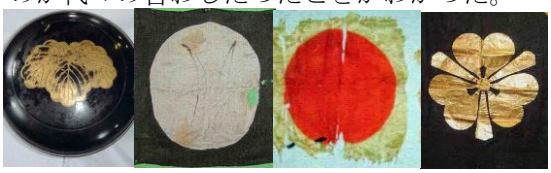
若き日の高虎は、伊勢国四日市の本陣森田屋に泊まる。空腹の高虎は玄関先の祝いの餅を食べたいと言い、宿主は白餅を枡に盛って提供した。「枡枡（ますます）御出世、末は白餅（城持ち）」の意味。翌朝、無一文であることを打ち明けたが、宿主は「御出世の暁にお支払いください」と言い、さらに銭五貫文を差し出した。その後、出世した高虎はこの宿を訪れ百両の金子と餅米二百俵を渡した。

このエピソードは後世の創作とするのが長く通説だったが、昭和五十年代半ばに新史料『中川蔵人日記』が登場。同家は代々津藩の番頭・家老職を務めた千五百石の家柄。日記を残した蔵人政寛（1793－1868）は６代目で三十五年間まめに日記を書き綴った。

参勤交代で帰国途中の天保十年（一八三九）五月十四日の条（抜粋）。

「十四日　晴　吉田御小寄　中西与左エ門方知恩院泊リテ差支　相本陣江御案内申上御吉例之通**餅**差上　一統へも差出　頗ル佳品右餅ハ高山様被召上候より連綿　御宿入より亭主麻上下ニ而搗候例之由　」

亭主の中西与右衛門が、裃姿の正装で餅をつき、主君に差し上げ家臣達にも振る舞われ、「すこぶる佳き品」と中川蔵人は感激し、「右餅は高山様（高虎公）がお召し上がりになられ（以来）連綿（と続いている）」と記す。歴代津藩主が藩祖を偲び中西家で餅を食するのが代々の習わしだったことがわかった。



蔦の家紋　**白餅**　**朱日丸**　**酢漿草（旗指物）**

藤堂藩旗指物は小牧長久手合戦の頃「**黒餅**」、関ケ原合戦の総旗は「白地に**朱ノ大餅**三ツ」、大坂冬の陣では「御のほりハ地こん、**白き丸**三つ」、**酢漿草**（カタバミ）などとされる。

酢漿草は消炎、解毒、下痢止めなどの作用があり、花言葉は「輝く心」、繁殖力強く根付くと絶やすことが困難で、「家が絶えない」に通じ武家の家紋として好まれたとされる。

六尺を超え戦の傷だらけの大男が「餅代が無い」と言えば恐ろしくて、「お金は結構です」と言わざるを得ない。出世後の恩返しは義理人情に厚い日本人の大好きな話です。

参考資料：、西田久光、出世の白餅考（三重ふるさと新聞）、Wikipedia、講談るうむ「出世の白餅」

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 8 月 13 日